

原三溪の美術蒐集記録「美術品買入覚」に見る

古美術蒐集品の変遷とその背景

人文科学研究科博士後期課程

三上 美和

はじめに

原富太郎（号 三溪、慶応四年・一八六八―昭和十四年・一九三九）は、横浜で生糸貿易を扱った大実業家であるが、日本美術史においては、古美術の蒐集を大規模に行ったこと、近代の画家や彫刻家を援助したことで知られている。

三溪の特筆すべき点は、それを逐一記録に残していたことである。その「美術品買入覚」（以下「買入覚」と略称する）と題された一連の記録は、三溪が明治中期から昭和初期にかけ蒐集した美術品の内容を知ることが出来る貴重なものである（一）。

三溪に関しては伝記も多数出版され、本資料の最初の部分が白崎秀雄により、また本資料に記載された近代絵画が石田治郎により紹介されているが、美術蒐集そのものについては考察の対象とされていなかったため、先行

研究を踏まえ、筆者は全ての近代作品を資料化し、内容を分析した⁽²⁾。

三溪が美術蒐集を始めた明治二十年代、明治維新を経て没落した大名家の売り立てにより古美術の名品が数多く市場に回り、三溪を初めとした新たな財界の担い手たちがそれらの古美術品の所有者となった。

本稿では、そうした古美術品に焦点を当て、近代有数の美術蒐集家であった三溪の美術の嗜好の変遷を以下の点から論じていく。

初期の蒐集では、文人趣味の横溢が見られる。自他共に認める中国美術好きの反映であるが、その背景として、幕末から明治初期にかけて煎茶趣味、文人趣味の流行を指摘する。

周囲からの影響も大きい。中でも益田孝（号 鈍翁、嘉永元年・一八四八―昭和十二年・一九三七）を初め、三井財閥の関係者と事業を通じて関ったことから茶の湯の趣味を持つようになり、茶の湯道具の蒐集へ傾斜した。また、資料によると、ほぼ全蒐集期間に渡り骨董商を通じて購入しており、美術市場との繋りも密接であった。

明治末期には、仏教美術の蒐集が集中的に行われている。当時、既に仏教関係の遺物は古美術として広く認められているが、三溪も奈良の古美術商を介して盛んに蒐集している様子が三溪自筆の書簡からも窺われる。三溪の旧蔵美術品で著名なものはこの頃までに大体集められ、美術専門誌『國華』でも紹介されていることから、明治末期が蒐集の一応の完成期と考えられるが、この時期は三溪が仏教美術を蒐集した時期と重っている。

さらに、三溪は俵屋宗達の近代における再評価の先駆として知られているが、宗達光琳派の作品もこの時期に集中して蒐集されている。

なお、大正期以降、蒐集は古美術市場の興隆と共に一層充実していくが、明治末期を三溪の蒐集が一応完成に至った時期と考え、明治期までを中心に扱い必要に応じて大正期にも触れた。



図版1 「美術品買入覚」全五巻 三溪園保勝会蔵

1 「美術品買入覚」の概要と初期蒐集品の傾向

「買入覚」（全五巻、図版1）は、近年三溪の子孫によって三溪園保勝会に寄贈され、その蒐集内容の概要が明らかになった。全て三溪の自筆により、構成は以下の通りである。各巻の巻数と番号は執筆者が整理のために付け、基本的に表記作品名一点をひと数えた。

一卷

表紙名なし

明治二十六年（一八九三）—三十年（一八九七）

見出し「書画買入覚」 1—184

続いて追加として、明治三十年分の書画以外の記載がある。

185—244

明治二十六年—三十年

見出し「骨董品買入覚」 245—685

二巻

表紙名なし

明治三十一年（一八九八）—三十五年（一九〇二）

見出し「書画買入覚」 686—848

見出し「骨董品買入覚」 849—1344

三卷

表紙名 「美術品買入扣」

明治三十六年（一九〇三）—四十一年（一九〇八）

見出し 「書画骨董買入覚」 1345—2195

四卷

表紙名 「美術品買入覚」

明治四十二年（一九〇九）—大正六年（一九一七）

2196—3063

五卷

表紙名 「美術品買入覚」

大正六年（一九一七）—昭和四年（一九二九）

3064—4124

記載事項が四千百点余りと膨大であることと、作品がほとんど散逸し記載作品の特定が難しいため、全てを把握してはいないものの大きな蒐集の傾向は掴むことが出来た。蒐集の変遷を追うため、年代ごとに蒐集品を分析して表にしたのが資料1と資料2である。

本稿では蒐集の時期を大きく形成期と完成期に区分した。三溪自身が蒐集を始めたと述べている明治三十年頃（3）、概ね主要な所蔵品が集まった明治末年までを完成期と考え、それ以前を形成期とする（4）。この時期については新井朋子が最も詳細に論じている（5）。

また、資料2の備考欄にも載せたが、近代最初的美術専門誌である『國華』に「原富太郎所蔵」として所蔵品

27 原三溪の美術蒐集記録「美術品買入覚」に見る古美術蒐集品の変遷とその背景

資料1 「美術品買入覚」に見る最高金額購入作品、総購入数、総購入額

年	最高額品	金額(円)	総購入数※	総購入額(円)※	備考
巻1					
明治26	白玉函式花瓶	170	25	249.2	
27	蕪村 秋山遊鹿	60	150(67/ 83)	2009. 4(1093. 95/ 915. 45)	
28	古銅獸面花瓶	240	189(31/158)	3216. 5(397. 8/ 2818. 95)	
29	松翁巻	80	240(23/217)	4001. 6(617. 5/ 3384. 1)	
30	海鼠水注	1000	174(41/133)	13331. 45(3110. 0/10221. 45)	
巻2					
31	竹田 赤壁山水	800	142(14/128)	7032. 0(1885. 0/ 5. 47)	
32	王維章 山水	450	130(31/99)	1499. 5(5723. 0/ 9272. 5)	
33	古銅手付水指	8000	116(27/89)	10355. 8(3695. 6/ 6660. 2)	古美術商の取引初出。
34	応挙 虎屏風	1000	150(57/93)	50493. 0(31700. 0/18793. 0)	
35	青磁香炉 春日山硯箱	6700	121(34/87)	42703. 0(17260. 0/25443. 0)	古美術商との取引増加。國華]146号に所蔵品掲載(第1回目)。
巻3					
36	孔雀明王像	10000	202	56757. 51	東博蔵。
37	青磁鯉耳花瓶	1400	61	14281. 59	【國華】176冊、「集古十種」購入。
38	一字金輪仏	5000	105	28665. 28	重文、東博蔵、【國華】186号に所蔵品掲載。
39	間慶天画像外巻幅	12000	192	76857. 4	MIHO MUSEUM 蔵、【國華】189号に所蔵品掲載。
40	宋画三蔵法師画	15000	195	79345. 63	重文、東博蔵、【國華】200、210、211号に所蔵品掲載。
41	藤原時代螺鈿香合	3200	96	39441. 0	【國華】1216、219、220、221、222号に所蔵品掲載。
巻4					
42	高野切巻物	16000	162	117929. 0	【國華】224、227、229号に所蔵品掲載。常盤山文庫蔵。
43	蕪村 秋晚田舎図	15000	103	136023. 0	【國華】240、241、247号に所蔵品掲載。
44	周銅横彝	10000	76	43912. 0	【國華】248、250、251号に所蔵品掲載。「彝」は宗廟に供え置く酒器の類。
大正1	大観 瀟湘八景圖鏡	3000	40	20796. 0	東博蔵。
2	光琳二幅乾山みたれ箱	31000	60	87874. 0	乾山「武蔵野・隅田川乱宮」(重文)、大和文華館蔵。
3	光琳 山樵硯箱	6000	52	16411. 0	
4	五十三次巻九巻	4000	100	26664. 0	【國華】297、306号に所蔵品掲載。東京国立博物館蔵。
5	元信伯牙山水	26190	122	136018. 45	「伯牙弹琴図」、パークコレクション。伊達家入札作品、三浦家入札作品、下条家入札作品購入。
6	因陀羅祖師問答幅	17860	220	255962. 0	秋元家入札作品、赤星家入札作品、高橋是清入札作品、京都神田家入札作品購入。
巻5					
7	可翁 山水	30510	162	203834. 0	【國華】335、339号に所蔵品掲載。
8	最澄 尺版	100000	161	520226. 0	高橋是清入札作品、池田家入札作品購入。【國華】345、351号に所蔵品掲載。
9	浮線綾手箱	275000	123	476468. 0	重文、サントリ美術館蔵。
10	伎楽面乾漆共三	12000	123	174655. 0	
11	本手立鶴背磁	45600	133	238212. 0	【國華】382号に所蔵品掲載。
12	畠山茶入	82000	117	371558. 0	
13	志野水指	2200	5	620. 0	
14	光琳 東下り	14000	9	29070. 0	
昭和1	光悦 茶碗黒	13500	74	28404. 25	
2	利休 瓢花生	2617	19	15279. 0	
3	伊賀水差	3000	49	143583. 5	
4	井戸茶碗	10000	13	15695. 0	

※明治35年までの()内は資料の記載に従い(書画/骨重)の順に表記した。

資料2 「美術品買入覚」分析表

年		文人画	円	煎茶道具	円	茶の湯道具	円	仏具	円	仏画	円
巻1											
明治26	1893	17	109.5	41	368.7	7	48	1	7.5	0	0
27	1894	52	685	(2年分)		(2年分)		(2年分)			
28	1895	12	179.8	104	2309.75	14	255	0	0	0	0
29	1896	10	372	53	1337	30	686	7	140.1	0	0

巻2

30	1897	14	1257	42	3039.3	48	2355.25	2	158	1	700
31	1898	8	1525	46	3105.66	52	1228.3	0	0	0	0
32	1899	12	1400	64	4887.5	12	2819	2	515	0	0
33	1900	8	1582	42	2521.7	10	1732	0	0	0	0
34	1901	12	4790	27	3575.5	13	1343	2	380	5	4745
35	1902	4	1250	21	2598	4	530	23	12620	14	9355

巻3

36	1903	2	620	20	1304.5	3	1067	90	28523.5	5	14135
37	1904	1	200	1	200	2	1510	22	6630.4	1	250
38	1905	0	0	4	187.5	5	237	31	16135.8	2	10500
39	1906	0	0	6	4619	5	2620	38	10340	5	24300
40	1907	0	0	7	1985	12	1228	28	16133	3	18050
41	1908	4	6225	2	130	6	1246	9	6803	1	1000

巻4

42	1909	3	5510	4	980	6	4475	7	2900	2	555
43	1910	6	25310	4	1025	1	1000	5	11702	1	850
44	1911	4	10950	4	57	14	1840	3	13525	0	0
大正1	1912	1	450	4	553	0	0	2	20	0	0
2	1913	1	3000	6	7329	1	188	2	5575	0	0
3	1914	8	7215	1	450	4	2213	0	0	0	0
4	1915	4	3680	3	335	9	1211	1	600	0	0
5	1916	24	17592	4	2673	8	8543.8	6	15935	0	0
6	1917	23	16823	9	6266	13	9676	6	10364	1	214

巻5

7	1918	5	3622	10	21189	11	31143	7	1575	0	0
8	1919	5	23259	16	65638	17	28963	12	62771	3	4010
9	1920	2	6560	5	1937	48	86717	4	8380	0	0
10	1921	2	4700	4	1533	47	102617	9	8139	0	0
11	1922	2	5050	7	9480	68	137240	4	3180	1	700
12	1923	3	3486	6	2860	56	192003	1	3200	0	0
13	1924	0	0	0	0	5	5380	0	0	0	0
14	1925	0	0	0	0	5	15110	0	0	0	0
昭和1	1926	0	0	3	397	36	75009	2	6279	2	250
2	1927	0	0	2	72	8	10073	2	250	0	0
3	1928	0	0	2	45	11	7805	6	5025	0	0
4	1929	0	0	0	0	5	11075	0	0	0	0

※明治30年までは書画と骨董の区別あり。明治26年と27年分は合せて記載されているため「2年分」とした。

が紹介され始めたのが明治三十五年（一九〇二）からであり、明治末年までに二十回紹介されている。このことから、明治末年が一応の蒐集の完成期と考えられる^{6）}。

また明治三十六年は「買入覚」によると代表的な収蔵品である「孔雀明王像」（国宝 東京国立博物館蔵）を一万円で購入した年である。井上馨からの本仏画の購入は、三溪についての最も著名な挿話でもあり、これにより三溪の古美術蒐集は

鈍翁ら近代数寄者に認知されたことから、それ以前の蒐集と一線を画する⁽⁷⁾。

さらに、明治二十六年（一八九三）という早い時期から蒐集が始まっていることも指摘したい。年譜にあるように、三溪が原家に養子に入ったのはその前年であり、当主である原善三郎が死去するのが明治三十一年（一八九八）である。本資料から、三溪が原家に入籍後直ちに蒐集を開始していたことが分る。後述するように、三溪の美術蒐集がよく知られるようになったのは明治三十年代後半からであるが、それよりかなり早い時期に蒐集は始められていた。

初期の蒐集が文人画から始まったという点は既に広く認められているが⁽⁸⁾、それは資料2からも裏付けられる。明治二十七年（一八九四）には金額こそ少く、与謝蕪村といった著名な文人画家によるものばかりではないものの、五十二点も購入されており、蒐集期間中最も多い⁽⁹⁾。

その後の経過は、資料1の総購入金額を見ると、増減を繰り返しつつ、大正五年（一九一六）から急に金額が増え、大正七、八年で最高のおよそ五十二万円となり、大正十二年を境にして、減少に転じている。三溪の事業が大正十二年（一九二三）に起った関東大震災の影響を受け、蒐集もこの時期までだった、とされていることと一致する。しかし、実はその後も少し盛返しつつ、昭和四年（一九二九）まで購入されていたことも分る。

資料1には最高金額で購入された作品も併載したが、大正九年（一九二〇）には「浮線綾時絵螺鈿手箱」（サントリー美術館蔵）が、この年の半分以上を占める二十七万円という破格の金額で購入されている。「買入覚」によると、明治三十五年（一九〇二）から古美術商との取引が次第に活発になっており、三溪がこうした古美術商を通して、当時の美術市場と積極的に関りつつ蒐集活動を展開したことが考えられる。

資料1の大正五年以降を見ると、旧大名家や公家、富豪の旧蔵品が古美術商を通じて購入されていることからいわれる高額な名品を購入していた時期といえる⁽¹⁰⁾。

さらに、「買入覚」を概観してまず目に付くのが茶道具と仏教美術の多さであり、それらを年毎に拾い出したものが資料2である。

資料2によると、煎茶道具は蒐集を始めた明治二十六年（一八九三）からおよそ十年間、つまり蒐集時期の前半の三分の一に集中して購入されている。その後再び大正八年（一九一九）頃盛んになり、それ以降も数は減っているが、後半まで購入されている。

一方、茶の湯道具を見ると、最初の頃こそ煎茶道具より数、金額とも少いが、大正八年頃からの数年間、圧倒的に高額になっているのが特徴的である。

2 明治初期の煎茶趣味の流行と三溪の文人趣味

三溪の文人趣味について考えるに先立ち、まず幕末から明治にかけて煎茶趣味の流行について述べたい。

そもそも煎茶趣味とは、中国明時代に盛んに行われた喫茶の方法であり、文人が書画や文学について語りながら、煎茶を専用の道具で煮出し、静かに飲む、といった文人の生活様式である。日本には、明時代の末期、黄檗宗の僧、隠元が来日した際に伝わったといわれている¹¹⁾。その後は、幕末から明治にかけていつそう盛んになったことが、茶書の出版や、煎茶席の記録である「茗讌図録」が膨大に残されていることから指摘されている¹²⁾。

この「茗讌図録」には、煎茶席に出された道具の名前と、絵画化された煎茶席が掲載されている。その煎茶席は、現在茶の湯でよく行われている、多数の人々を一度に招待するいわゆる大寄せの茶会の形式が取られ、こういった「茗讌図録」もその時参加者に配られたものであった。文房具が並べられている様子や、煎茶道具そのものの図が載せられていることから、現在の美術鑑賞の先駆的な役割も指摘されている¹³⁾。

その後、幕末から明治初期にかけて煎茶趣味は大流行するが、その理由として、江戸後期から幕末の知識人の

教養としての中国文化の浸透、十八世紀末からの急激な煎茶の質の向上と良質な煎茶の普及、煎茶が明治初期の有力な輸出品の一つと目されていたこと、といった理由が先ず挙げられる⁽¹⁴⁾。一方、武家の嗜みとして行われていた茶の湯の道具偏重、俗化への批判的精神の表れとして始ったとされる煎茶の世界でも、この時期茶の湯同様、高価な道具を盛んに用いた大煎茶席が盛んになったとされており⁽¹⁵⁾、新たに勢力を持つようになった豪商、下級武士らに広まったと思われる。明治初期には、それまで支配層の教養であった茶の湯が衰退しており、それも煎茶の流行に拍車をかけた⁽¹⁶⁾。つまり、煎茶趣味は幕末、明治初期の混乱期に在野の人々の間で広く普及し、盛んになったのである。

三溪と文人趣味を結びつけるきっかけは、これまでの研究でも指摘されているが、まず外祖父に当たる文人画家高橋杏村や父親の文人趣味の影響が大いに考えられる⁽¹⁷⁾。それらも以上のような幕末の煎茶趣味の流行の環境として位置付けられる。

さらに、三溪に直接影響を与えたと考えられる人物に、文人画家で、明治の女子教育の分野で先駆的な活動を行った跡見滝野（号 花蹊、天保十一年・一八四〇—大正十五年・一九二六）がいる。花蹊の女子教育は、最初公家の子女の教育を依頼されて始ったことから、上流階級の子女たちが跡見女学校に集まった。その一人として、原家の継嗣である屋須子も明治十八年（一八八五）に入学している。当時の両者の関係を示す資料はないが、伝記によると、花蹊は屋寿子と三溪の結婚の時、その仲介をしたとされている。その当時、花蹊は四十五歳で文人画家として、また女子教育の分野で既に優れた業績も残しており、それ以前に三溪が影響を受けたことは十分考えられる。

また、三溪の煎茶趣味を示す資料として二点挙げたい。ひとつは明治二十二年（一八八九）、三溪が二十二歳の時に開催された大寄せの煎茶席のカタログ、いわゆる「茗譚図録」である（図版2）。

これは当時の大蔵官僚郷純造が退官の際に催した煎茶席の記録であり、三溪園の蔵書中にあるものである。当時まだ若輩であった三溪が招待されたとは思えないが、花蹊と三溪は親しかったことから、花蹊に誘われた可能性もある。

もう一点、「買入覚」二巻の最終頁に、三溪が書いた煎茶席のスケッチ（図版3）がある。

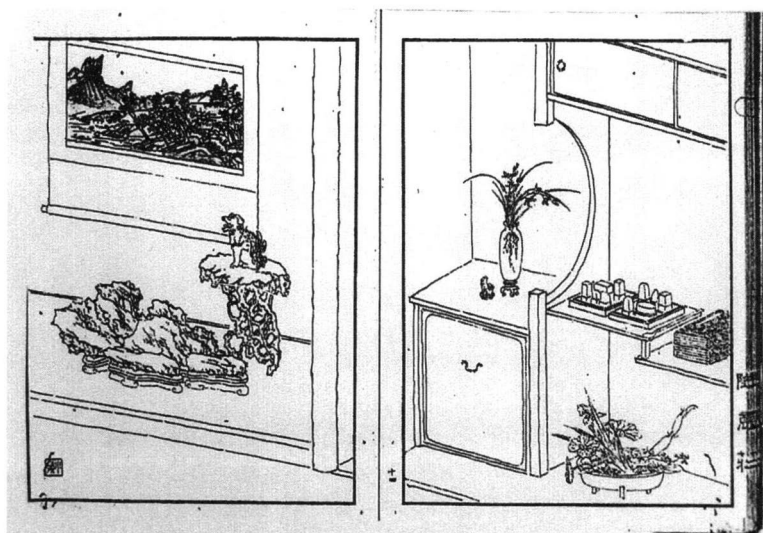
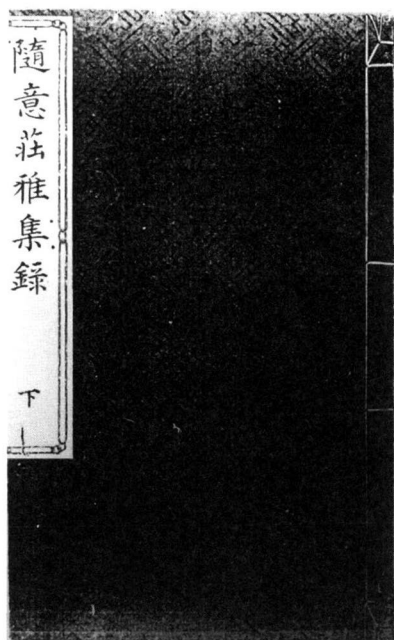
このスケッチを見ると、具体的な道具の取り合せが丹念に描かれており、記録の年代から、ちょうど煎茶道具を蒐集していた時期と重なっている。当時三溪が煎茶席を開いた、という話も残っており、それを傍証するものの一つといえる。

そのように文人趣味に浸っていたと思われる三溪が、資料2で見たように、明治末期から、茶の湯道具、さらに「名品」の購入へと意欲を示し始める。

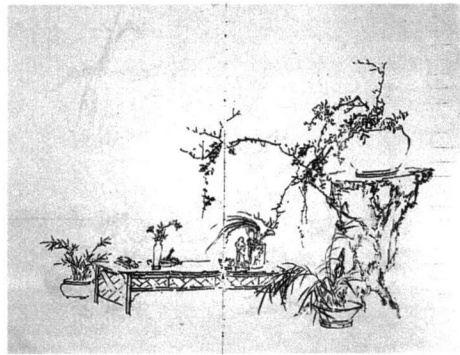
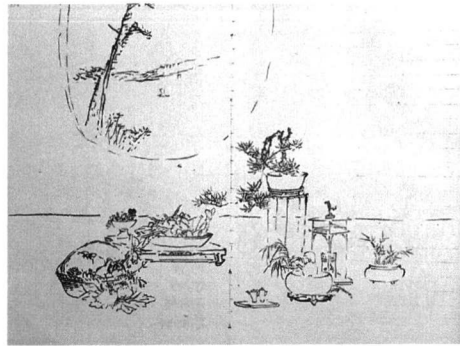
この時期の三溪の蒐集の方針を示す資料としては、三溪が奈良の古美術商、今村甚吉に宛てた書簡がある⁽¹⁸⁾。明治三十四年（一九〇一）から四十年（一九〇七）までの書簡のうち、明治三十四年には、格別名品は望まないと書いていたものが、明治三十六年の書簡には、これからは名品を、と強い調子で述べている。そして、その言葉を表付けるように、今村からの購入が多くなり、また、購入金額も増えていったことが資料に見える。

また、明治三十六年七月の書簡で、その春に京都の博物館で見た唐櫃と今村から送られてきたものを比較し、到底比較にならないため送り返す、という下りがある⁽¹⁹⁾。三溪がどのような作品を見たのかは不明であるものの調べてみるとその年の三月から七月まで「平安奠都以降時代品展観」展が開催されており、「黒地鳳凰紋不滅貝唐櫃」一点が展示されており、本作品を見た可能性が高い⁽²⁰⁾。三溪は博物館の展示で見た作品を「名品」と捉え、蒐集の基準としているのである。

次に、三溪をそうした名品の蒐集に駆り立てた背景と、あわせて仏教関係の蒐集を行った背景について探って



図版2 「隨意荘集録」(三溪園保勝会蔵)



図版3 「美術品買入覧」二巻末スケッチ 三溪筆

いきたい。

3 益田鈍翁による古美術の茶道 具化と古美術鑑賞

三溪の古美術蒐集には、益田鈍翁の影響がかなり大きいと思われる。

茶道史の流れにおいて、鈍翁の茶人としての特質は、それまで茶と縁がなかった美術品、中でも仏像、仏画といった仏教関係の諸道具を茶会に出すことで、美術館での美術鑑賞の要素を茶会に加えたことが指摘されている⁽²¹⁾。

鈍翁は、幕末に英語を学び、明治維新を迎えたという、当時としては進歩的な人物である。両替商であった三井家の売り立てに立会い、そこで放出された古美術品の中でも茶道具に異常な関心を示し、いわゆる名品競いのエピソードも多く残した。しかし一方、幕末から明治にかけて、仏教美術が海外に流出するのを目の当りにし、また仏教美術を愛好する内外の古美術愛好者の影響を受け、宗教遺物を美術品として捉える新しい美意識を持つようになったとされている⁽²²⁾。

三溪が名品の蒐集に強い意欲を示した背景と、仏教美術への関心には、この鈍翁の道具鑑賞の影響がある。年

譜に見られるように、三溪は三井物産と生糸貿易を通じて明治三十年代に関っており、その過程で影響を受けていたと思われる。

そのことは、三溪が鈍翁の茶会に積極的に参加していることから明らかである。鈍翁が始めた新たな形式の茶会の中でも、仏教と結びついた茶会として「大師会^{だいしかい}」がある。弘法大師を顕彰するこの茶会には、盛んに仏具、仏像、仏画が用いられている。三溪も大正十二年（一九二三）に「大師会」を開催しており⁽²³⁾、その記録が残っているが、そこで三溪は古美術の名品とともに仏教関係の諸道具を用いている⁽²⁴⁾。

4 仏教遺物の古美術化の背景

① 奈良の古美術商との取引

明治末に三溪が仏具、仏画を大量に購入した背景の一つには、先述した今村のような奈良の骨董商の活動が大きく関わっている。明治三十八年（一九〇五）頃、法隆寺村の今村甚吉の他、玉井大閑堂、森田一善堂、柳生醉古堂、大隈集古堂の五軒が勢力を持っていたという⁽²⁵⁾。「買入覚」にも森田、柳生の記載があるため、明治末の一期、明治初期以降放出された仏教関係の品を扱っていた業者があり、彼らが仏教美術を求めた鈍翁、三溪の期待に答えていたのである。

② 博物館の古美術蒐集と保護政策

なぜ三溪が仏教美術をさかんに蒐集したのかを明らかにするために、少し時代を遡り、幕末から明治にかけての美意識の変化を考えたい。

仏具が古美術として鑑賞されるようになった背景として、おおよそ次の点が挙げられる。

まず、明治初期に明治政府が行った神仏判然令をきっかけとして起ったいわゆる廃仏毀釈により、仏像や仏画が寺院から持ち出され、あるいは寺院自身によって売りに出され、さらにそれらが欧米知識人に評価され海外に持ち出される、という事態になる。明治初期に貿易会社を興した鈍翁もこのような経験をしていたため、いち早くこうした事情を知ることができたのである。

ここで、仏像や仏画を信仰の対象としてではなく、美術品として見る新しい鑑賞様式が持ち込まれ、価値の転換がなされたとされる²⁶⁾。それ以前にもこうした観点がなかったわけではないという指摘もあるが²⁷⁾、明治以降、今村のような仏教美術を扱う古美術商が現れ、三溪ら美術蒐集家により蒐集の対象と見なされるようになったことを考慮すれば、幕末から明治期に、仏教遺物に対する認識が変質したことは明らかである。

もともと、三溪自身、それらを完全に宗教と切り離して鑑賞していたのかという点についてはさらに検討が必要である。鈍翁については、その茶道観を見る限り、仏教に限らず一切宗教色は見られないという指摘があるが²⁸⁾、我々の日常を見ても分るように、ゆるやかな宗教意識といったものがないとはいえない切れないのではないだろうか。三溪を初めとした近代教寄者の宗教観と茶道の関係については今後の課題としたいが、こういった美意識は、鈍翁だけでなく、明治初期に欧米諸国から学んだ幕末の知識人の多くに共有され、明治初年に開館した博物館の構想にも影響を与えていく。この博物館における美術政策の思想的背景は、民間の美術鑑賞者であった鈍翁や三溪とも共通しているのである。

公的な古美術保護に関しては、廃仏毀釈後の明治五年（一八七二）、明治政府によって全国的に古社寺調査が行われた。政府は全国の古社寺の宝物調査を行うに当り、各社寺の所蔵目録を出させるとともに、所蔵品の購入を申し込んでいる。さらに明治二十一年（一八八八）には、臨時全国宝物取調局が設置され、明治三十年（一八九七）に古社寺保存法が制定される²⁹⁾。

こうした公的な動向の一方、明治二十年代、仏教関係者による仏教の美術化の動きも指摘されている。排仏毀釈後の仏教界の新しい試みの一環として、仏教関係者により仏教美術の全集の出版がなされたという。その際、先述した古社寺調査の成果がふんだんに取入れ、政府の古社寺調査、仏教美術の再評価と歩を一にして進められた。三溪も明治四十年代には、その株主の一人となっており、そういった仏教美術の新たな認識の広がりについていた⁽³⁰⁾。

以上のことから、三溪は、近代における古美術、仏教美術の再評価、また茶道の復興という大きな同時代の思潮に身を置き、自身的美意識と照し合せながら美術蒐集をしていたのである。

6 「買入覚」に見る琳派作品

最後に三溪の宗達再評価について資料から検証したい。この点については矢代幸雄の指摘が古いが、近年までしばしば言及されている⁽³¹⁾。資料3は「買入覚」から光悦、宗達、光琳らの作品を抜粋したものと、その総数をまとめたものである。三溪がその収蔵品を日本美術院を中心とした同時代の画家や彫刻家に見せ、金銭的な援助に加えて制作においても支援したことはよく知られているが、その蒐集の様相を把握できる。

これを見ると、具体的な作品が判明しているものは少ないものの、明治末までにかんりの数が購入されていることが分る。それらの作品の金額が具体的に記されているため、当時の市場性を知る資料ともなっている。

まず明治三十年代に光悦の茶碗が数年購入されていることから、茶の湯への傾倒が琳派作品の蒐集へ向う最初の契機であった点に注目したい。数の上では光琳に次いで乾山が多いことから、三溪の美術蒐集は、あくまで茶会での使用を念頭に置いたものであったのである。

また、明治三十九年以降購入作品数が増え、高額な作品も次々に購入されている。明治三十六年から三十九年

資料3 三溪旧蔵宗達光琳派作品リスト及び総数

購入年度 (和暦)	西暦	作者	作品名	購入金額 (円)	備 考
明治 29 30	1896 1897	乾光 乾山	紅毛写盃 赤茶碗 檜梅	15 75 100	
31	1898	乾光 乾山	蓋置 向皿五枚 布袋香合	4.5 18 35	
38 39	1905 1906	光琳 光珠	手箱 光琳所持漆机 印籠 梅竹印籠 茶碗二箇 扇面四枚 扇面一枚 破墨山水 三幅対 焼物硯箱 誦本	35 60 165 170 250 300 50 150 1200 1000 1800	
40	1907	乾光 光空 光悦 一山	乾山血五枚 在野波硯箱 布袋箱 蓮香炉 光悦式大机 鬼墨画 短冊血十人前 立葵小刀 火入烟草盆	200 2500 210 55 350 225 50 400	
41	1908	乾光 光悦 一山	歌物箱 笛筒 一枚折 秋草猪口十 梅花碗五 百合向付五 鴛物二簍	100 500 1000 100 75 80 358	大和文華館蔵。 さつま血と共に購入。 サンリツ服部美術館蔵。
42	1909	乾光 其宗 達山 達山 達山 達山 始光 光平	乾山百舍両付 絵皿四十枚 せきれい松葉幅 襖四枚 桔梗血五枚 血十枚 鴨幅 七賢人 布袋 扇面 煙草盆	55 800 20 1000 100 250 1150 400 200 300 25	2点分。 「竹林七賢図」。
43	1910	乾光 山珠 悅山 悅山 悅山 山珠	花籠園 小警馬圖 連下絵に歌 屏風 波に蕪 山水	13000 1000 150 23000 650	福岡市美術館蔵。花籠園、古土佐 残欠と共に購入。 他数点と共に購入。
44	1911	乾光 乾山	血二枚 梅素碗	200 150	
大正 2 年	1913	乾光 宗達 宗達 山珠	乾山連二幅 みたれ箱 团扇 一達舟 屏風半双 团扇屏風対 山權堂 鶴図 みそぎ二枚折 百合扇面 赤茶碗 蛸子 小町草紙洗 布袋	800 180 81000 100 1380 500 6000 4000 5500 630 1000 50 17300 3200	光琳 2 幅と共に購入。乾山「武藏野・ 隅田川乱宮」和大和文華館蔵。
3	1914	光琳	水懸山水 三幅神横物	1300 100	
4	1916	光琳	孔雀樹立 東下り 六枚折	19250 14000 2000	
5	1917	宗達	鬼香合	23000	雲州家入札、井戸茶碗と共に購入。 出光美術館蔵。三溪の箱書きあり。
6	1918	光悦	茶碗黒	13500	
7	1919	山珠			
11	1922	達山			
13	1925	光琳			
昭和元年	1926	光悦			

総 数	75
光 淋	20
乾 山	19
光 悦	15
宗 達	8
抱 一	6
その他	8

※作者、作品名は「買入覚」記載による内容が不明であるものには?を付した。

にかけ、三溪も関っていた審美書院から『光琳派画集』（全五冊）が刊行され³²、明治三十六年は近代における琳派再評価の画期的な年であったとされている³³。こうした近代における美意識の形成に三溪も加わっていく過程が資料的にも裏付けられる。

おわりに

以上述べてきたことは、あくまで資料の上からの考察を、同時代の美意識の流れの上に乗せてみたに過ぎず、その中で三溪が積極的な役割を果たしたのかどうかについては、他の蒐集家との比較を含めた、より広範囲の検討を要する。しかし、資料を通して見た限りでも、三溪が当時の美術を取り巻く動きに敏感に反応している様子が垣間見られた。当時の仏教美術に対する三溪らの対応が、同時代の文化政策の影響を深く受けている点を考慮すれば、三溪を始めとした実業家の古美術蒐集は、一部の好事家による趣味的な動きではなく、現代に連なる美術鑑賞の先行形態として、より大きな時代の流れの中に位置付けられるべきである。

〔注〕

（1）三巻のみ表題が「美術品買入扣」となっているが、本名称が既に定着していること、他の巻は「美術品買入覚」となっていることから、資料の名称を後者に統一した。

（2）三溪の伝記は、詳細な藤本實也『原三溪翁傳』（稿本）と、そのダイジェストである森本宋『原富太郎』（時事通信社、一九六四年）の二冊が主要なものであり、本論も基本的にこれらに負っている。なお『原三溪翁傳』は手書

き原稿であり、この複写及び翻刻を、元三溪園保勝会学芸員石田治郎氏の御好意により閲覧した。上記二冊を踏まえた白崎秀雄による伝記『三溪 原富太郎』（新潮社、一九八八年）では、それまで踏襲されてきた「跡見女学校助教師説」が白崎自身の調査により否定されているが、筆者の調査の結果も同様であり、信頼できる。

三溪の近代美術蒐集に関しては、石田「原三溪翁の近代絵画コレクション『美術品買入覚』から」（『御舟・青樹・鶏村―原三溪ゆかりの作家たち―展カタログ、三溪園保勝会、一九九一年）、「原三溪と院展の作家」（石田、川幡留司『日本美術院百年史』第四巻、一九九四年）、拙稿「日本近代美術の蒐集家―原三溪の美術蒐集記録『美術品買入覚』に見る近代美術コレクションについて―」（『学習院大学人文科学論集』第十二号、二〇〇三年）参照。

（3） 矢代幸雄「三溪先生の古美術手記」（『忘れ得ぬ人びと』、岩波書店、一九八四年、二百十九頁）。

（4） 竹田道太郎は、明治四十一年（一九〇八）には三溪園がほぼ完成し、それより少し遡る明治四十年頃から古美術界、茶人仲間、新日本画運動において重要な存在となっていたとする（竹田『近代日本画を育てた豪商 原三溪』、有隣堂、一九七七年、四十八頁）。

（5） 新井「原三溪の古美術収集について」（『近代日本のあけぼの』、横浜高島屋、一九八七年、九十六頁―九十八頁）。

（6） 『國華』に原富太郎の所蔵者名で紹介された作品は六十三件、三溪の妻屋寿子の名で二件、息子の原善一郎の名で十六点、原良三郎の名で一点が紹介されている。本検索は学習院大学大学院松島仁氏の御協力を得て『國華』のCD-ROMで行った。

（7） 三溪自筆の古美術手記を矢代幸雄が引き写したとされる「三溪先生の古美術手記」（矢代前掲書、二百二十五頁）によると、「孔雀明王像」の購入は、明治三十七年に高橋義雄（号 箒庵）の仲介で、井上馨から購入したとされ

る。また箒庵による『箒のあと(上)(下)』(秋豊園、一九三三年、『日本美術の社会史』(瀬木慎一、桂木紫穂編、里文出版、二〇〇三年)に抄録)では明治三十五年とされるなど、既に当事者の間でも記憶が曖昧となっていたが、「買入覚」の記載は明治三十六年である。

(8) 矢代は文人画が三溪の出発点であり、三溪がそれらについて生き生きと描写していると述べており(矢代前掲書、三百三頁)、新井はそれらを祇園南海、池大雅といった江戸中期の文人画であつたとする(新井前掲書、九十八頁)。

(9) 文人画では谷文晁の「青緑山水」七十円が最高金額である。その他の画家では池大雅、池玉瀾、与謝蕪村、菅井梅閑、南湖春木、日根対山、長町竹石、細井平州、雲室光漸、鈴木芙蓉らの作品が見られる。

(10) 三溪旧蔵品における売立目録記載事項は、石田治郎氏に御教示いただいた。

(11) 「明末の煎茶流行と明清の煎茶法」、「日本の煎茶」(長谷川藩々居「煎茶志」、便利堂、一九六五年、五十八頁—七十九頁、八十七頁—八十八頁)。

(12) 熊倉功夫『近代茶道史の研究』、日本放送協会、一九八〇年、百三十一頁—百三十九頁。

(13) 玉蟲敏子「明清文物賞玩の系譜と静嘉堂コレクション」(『静嘉堂蔵 煎茶具名品展』カタログ、一九九八年、七頁)。

(14) 熊倉前掲書、百三十九頁—百四十三頁。

(15) 小川後楽「現代の煎茶」(『茶道学大系 第一巻 茶道文化論』(熊倉功夫、田中秀隆編、淡交社、一九九九年、三百十六頁—三百二十二頁)。

(16) 熊倉前掲書、百二十六頁—百三十九頁。

(17) 高橋杏村を初めとした、三溪の実家である青木家と文人趣味との関りは、稿本「原三溪翁傳」に詳細に書かれている(藤本前掲書、二十七頁—三十五頁)。

近年刊行された三溪の伝記『原三溪物語』（新井恵美子、神奈川新聞社、二〇〇三年）では、跡見女学校助教師の説の記述など従来の説の踏襲も見られるものの、三溪が幼少期に受けた文化的影響について詳しく述べられている。

- (18) 本資料は全て三溪園保勝会蔵。本論で取り上げた明治三十六年の書簡は松田延夫による「三溪・原富太郎抄録（上）」（『水茎』第二十一号、古筆学研究所、一九九六年）で取上げられている。

- (19) 明治三十六年七月九日 状

（前略）

唐櫃ハ成ル程

結構ニ御座候得共

今春京都博物

館之分を一見致候

上ハ到底比較ニ

相成不申候間此ハ

一時御返却可申候

（後略）

- (20) 京都帝博物館『時代陳列目録 自延暦元年至慶応末年』、一九〇三年、十八頁。なお、本展に出品された唐櫃は、明治三十三年の同博物館の第一回展に出品されていた唐櫃三点の内の一点であり、広く知られていた作品と思われる（京都帝室博物館『京都帝室博物館列品第一回目録』、一九〇二年、九頁）。

- (21) 熊倉前掲書二百四十四頁―二百五十七頁。

- (22) Christine M.E. Guth, *Art, Tea, and Industry : Masuda Takashi and Mitsui circle*. Princeton University Press, pp. 104-128, 1993 及び熊倉前掲書二百五十七頁。
- (23) 『大師会展観圖録』（審美書院、一九〇二年）。
- (24) 『大師会会記 横浜本牧 會場 三溪園』（三溪園保勝会蔵）によると、三溪は第一席の展観室陳列では「桃山史料」を、第二席の展観室陳列では「伎楽面（十面）」を展示し、亭主を務めた第七席「桃山遺構月華殿」には床に「伝経大師尺牘」、「螺鈿春日卓」、「天平毛彫銀花皿」を用いている。なお第二席は複数によるもので、他に益田鈍翁が「普賢菩薩画像」、「一字金輪画像」を、東寺が「月天像」、武藤山治が「金銅如意輪観音像」、玉井久次郎が「金銅聖観音像」を出している。これらの人々は出品者とされており、あたかも展覧会図録の所蔵一覧のようである。
- (25) 大閑堂玉井久次郎「奈良古器物と鈍翁」（『大茶人益田鈍翁』、学芸書院、一九三九年、百七十七頁）。
- (26) グース前掲書、百四頁―百九頁。
- (27) 仏教美術、大名道具、宮廷美術は、歴代の支配階級的美術として高く評価されたという指摘がある（佐藤道信『明治国家と近代美術』、吉川弘文館、一九九九年、五十三頁）。また、幕末から明治初期にかけての宗教的価値から非宗教的価値への仏教遺物の評価基準の転換については、さらなる検討が必要とされている（NEDACHI Kensuke, *The Present State of Research on the History of Ancient and Medieval Sculpture and Related Issues*. ACTA ASIATICA No.85, The Tōhō Gakkai, 2003, p.3）。
- (28) 熊倉前掲書、二百五十頁。
- (29) 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』、東京国立博物館、一九七二年、七十三頁―八十頁、二百九十一頁―三百三頁。

- (30) 村角紀子「審美書院の美術全集にみる『日本美術史』の形成」(明治美術学会編、『近代画説』8、一九九九年)。
- (31) 矢代によると、三溪は光悦に私淑しており、早くから光悦は絵は描かず、と主張していたという(矢代前掲書、二百九十一頁―二百九十四頁)。近年、俵屋宗達の正確な認識は大正期以降であり、その再評価に、三溪、鈍翁ら近代美術蒐集家とその周辺の研究者の貢献があったという指摘がなされている(玉蟲敏子『俵屋宗達』、同朋舎出版、一九九二年、四百五十頁)。
- (32) 佐藤前掲書、百二十九頁。
- (33) 玉蟲敏子『光琳観の変遷』一八一五―一九一五(東京文化財研究所美術部編『美術研究』、第三百七十一号、一九九九年、三十四頁―三十五頁)。

本稿は、平成十五年度学習院大学哲学会において口頭発表した内容に加筆修正した。資料の提供に快く応じていただいた三溪園保勝会及び元同学芸員石田治郎氏、小林ゼミを始め助言をいただいた方々に謝してお礼申し上げます。

45 原三溪の美術蒐集記録「美術品買入覚」に見る古美術蒐集品の変遷とその背景

〈原三溪年譜〉

藤本實也「原三溪翁傳」、森本宋「原富太郎」、『三溪記念館開館記念特別展、原三溪旧蔵日本美術展』巻末年譜、 『横浜近代史総合年表』、『日本史年表』、『東京国立博物館百年史』を参照して作成。					
年 号	西暦	年齢	事 項	関連事項（社会、経済、文化）	
(慶応4) 明治1	1867	1	8月23日岐阜県厚見郡（後に稲葉郡）佐波村（現在羽島郡柳津町佐波）に青木久衛の長男として生れる。	3月神仏判然令（俗称神仏分離令）が新政府から出され、これをきっかけに廃仏毀釈が起る。9月8日明治と改元（一世一元の制）。	
4	1871	4		5月太政官、古器旧物保存の布告を発する。	
5	1872	5		3月博物館、博覧会を開催して開館。5月町田久成、古社寺調査を実施。	
13	1880	13	佐波村尚文学校を卒業し、この年より3年間大垣の野村藤陰の鶴鳴塾に学ぶ。	博物館、第一回観古美術会を上野で開催。	
14	1881	14		益田孝（31歳）、初めて茶会を開く。	
16	1883	16	原善三郎、茂木惣兵衛らと共に龍池会に入会する（『大日本美術新報』第2号、1883年）。		
18	1885	18	東京専門学校（早大前身）に入学する（後中退、東京牛込早稲田東京専門学校〔明治30年12月報告校友会名簿〕掲載校友会規則による）。		
20	1887	20		図画取調掛を東京美術学校と改称（開校は明治22年）。	
21	1888	21	船山の紹介により跡見花簾を頼り上京（但し跡見女学校助教説は事実ではない）。	宮内省に臨時全国宝物取調局が設置され、以後全国の社寺の大規模な調査が行われる。	
22	1889	22		大日本帝国憲法、衆議院議員選挙法、貴族院令など公布。『國華』創刊。	
25	1892	25	横浜の豪商原善三郎孫屋壽と結婚し、原家に入籍。4月長男善一郎誕生。		
26	1896	26	横浜生糸合名会社、生糸直輸出開始。『美術品買入覚』記述開始（昭和4年まで）。	三井物産、合名会社となる。	
27	1894	27	10月長女春子誕生。	日清戦争開始（一1895年）。	
29	1896	29	東京専門学校（早大前身）の校友に推薦される。当時の職名は横浜電灯会社取締役、蚕糸貿易銀行取締役（東京牛込早稲田東京専門学校〔明治30年12月報告校友会名簿〕）。	三井物産、生糸直輸出再開。益田、弘法大師を顕彰した大寄席の茶会「大師会」開催。以後は毎年（死の前年まで）行われる。	
30	1897	30		古社寺保存法制定。	
31	1898	31	このころ天心、原家訪問。	日本美術院、岡倉天心、橋本雅邦らにより創設。	
32	1899	32	2月6日原善三郎（生糸売り込み商、貴族院議員、横浜第二銀行頭取）没、73歳。原家の家業（生糸売り込み商を主とする）、先代の郷里渡良瀬の設備二百益の渡良瀬製糸所を継ぐ。明治32年当時同伸会社、三井物産、横浜生糸合名の三社が生糸直輸出。本牧山之谷（現在の三溪園の地）に転居。	居留地撤廃、外人の内地雜居。『真美大観』刊行開始（審美書院、全22巻、明治41年まで）。	
33	1900	33	原商店を原合名会社に改組し、かつ従来の生糸問屋業のほか輸出業を創出し、モスクワ、リヨン、ニューヨークに代理店をおく。明治36年までの対露輸出の大部分を原輸出部で行う。	帝国博物館を東京帝室博物館とする。	
34	1901	34	株式会社第二銀行頭取となる。爾来改選毎に重任（『横浜銀行40年史』）。	『稿本日本帝國美術略史』出版（國華社）。	
35	1902	35	富岡、名古屋、大口の三製糸工場を三井家より譲り受け、先代以来の渡瀬工場と合わせて四製糸場を経営。		
36	1903	36	孔雀明王像を買い入れ、これより一層古書畫の蒐集に熱中する。	『光琳派畫集』刊行開始（審美書院、全6冊、明治39年まで）。	
37	1904	37	翌年にかけての日露戦争により対露輸出の第一次中絶状態。	日露戦争開始（一明治38年）。	

〈原三溪年譜〉

年 号	西暦	年齢	事 項	関連事項（社会、経済、文化）
明治39	1906	39	横浜本牧の自宅三溪園を市民のために公開する。	
40	1907	40	このころより日本美術院新進派を後援。	文部省第1回美術展覧会開催。
43	1910	43	生産調査会委員に任命される（内閣）。	
44	1911	44	恩賜財団済生会理事を依頼される。橋本静水と安田教彦、今村紫紅に以後2年間月100円の援助を申し出る（11月4日安田教彦宛天心齋簡（『岡倉天心全集』第7巻））。	
45 大正1	1912	45	下村観山に製作以来（2月4日下村観山宛岡倉天心齋簡（『岡倉天心全集』第7巻））。今村紫紅、安田教彦に以後2年間月々100円の援助を申し出る。	国内生糸輸出高、外国商社を上回る。 7月30日大正と改元。
2	1913	46	日本夏帽株式会社、日本リンネット株式会社その他の傍系事業を興し、また原合名会社拓殖部を朝鮮京城府に設置し、土地建物事業を興す。	
3	1914	47	再興第1回日本美術院展覧会開催。この際賛助員兼評議員となる。	1月1日から日露間の生糸直輸送開始されるが第一次大戦により貿易閉鎖。
4	1915	48	帝国生糸株式会社（第一次）社長に就任し、蚕糸業務救済に尽力する。この功により勲3等瑞宝章を贈られる。	
5	1916	49	5月インドの詩人タゴール、三溪園松風閣に3か月逗留。	
6	1917	50	三溪園内に臨春閣移築工事落成。またこの前後に旧東慶寺仏殿、旧東明寺二重塔、月華殿などの重要文化財古建築物の移築を行う。この頃三溪園にて古美術鑑賞会催される。	大倉集古館設立。
7	1918	51	神奈川県匠済会の設立に尽力し、昭和4年以降は死にいたるまでその会長となる。このほか慈善事業、社会福祉事業につくすところが多い。	
9、10	1920	53、 54	第二次帝蚕会社専務取締役就任し、第二次蚕糸業務救済に尽瘁する。同年また横浜七十四銀行整理相談役となり、横浜興信銀行の設立に尽力し、その取頭に推され、横浜金融危機の收拾に尽瘁する。昭和10年まで同行頭取を重任する。	
12	1923	56	4月三溪園で大師会開催。9月1日関東大震災により原合名会社、第2銀行共に全焼。横浜蚕糸貿易復興会理事長に就任し、身命を賭して横浜復興に務める。同年また横浜市復興会会長に就任。	9月1日関東大震災起る。
14	1925	58	保証責任横浜市復興信用組合の設立を発起し、その理事長にあげられる。	
15 昭和1	1926	59		12月25日昭和と改元。
4	1929	62	小安製糸研究所を設立し、自動繰糸機の研究を開始。	
9	1934	67	十二指腸潰瘍を病む。	
12	1937	70	長男善一郎脳溢血で死去。追悼茶会を開く（「一椀庵茶会記」）。	
13	1938	71	「余技」を自費出版する（川面義校正、大塚巧藝社）。暮れに肺炎にかかる。	益田孝死去（91歳）。
14	1939	72	8月16日横浜三溪園の自邸において死去（満71歳）。正五位に叙せられる。	
			没後事項	
16			大日本蚕糸会総裁関院宮載仁親王より恩賜賞を贈られる。	
29			神奈川県横浜市の横浜商工会議所共同主催の開国百年祭記念祝典に際し功労者として表彰状を追贈される。	